

びふりおてか



同志社大学図書館報 №33. 1983. 4. 1

昨 今 の 本

文学部長 金 田 民 夫

この正月、美術館に勤めている卒業生が訪ねてくれた。このシリーズの第一巻を担当することになりましたと言って、彼は美術書のカatalogを見せた。確かにユニークな企画で、しかも仲々の豪華本である。自分の勉強にもなるし、しっかり書くように激励して、ふと定価を見ると、一冊が48,000円である。全10巻の一時払で、特価44万円としてある。良いけれど、これは一寸買えないと言って笑った。

最近、われわれの研究領域でも随分と高価なものが出版される。かつて学生諸君に安もの本は買わないようにと私は言った。安ければ、それだけ粗雑な出来のものであろうし、図版なども良いかげんな印刷で間に合わせてあると思うからである。そんな色刷りのもので研究を進めようものなら、とんでもないことになるわけである。高いものは、印刷技術に手を掛けているだけ、かなり正確な複製図版が出来上がるはずである。日本の印刷技術をもってすれば、良い図版を作ること何でもない。しかし高い本を、いくら図版が正確だからといっても、学生諸君に勧めるわけにも行かない。研究者

目 次

昨 今 の 本	1
鎖国下の漂流民	3
大学生活と図書館	5
民俗学に関する二次文献 (30)	6
実例を中心とした 資料のがさし方 (23)	10
ピックアップ 一キリシタン高札	12

でも手の届かない本が出版される時代である。中位の出来のものがよいとも言えず、殊に美術書については悩みの種である。高くても良い本を図書館などで購入すればよいのかもしれないが、次々に類書が出版されると、それを全部揃えるというのも大変であろう。

現代は図書の氾濫時代ではないかと思う。氾濫というと、悪書のことが頭に浮ぶが、悪書が溢れていることも事実ながら、よくもこんな本が出版されたものだと思心する程の良書もまじっている。所謂玉石混淆の氾濫時代と言うべきであろう。悪書といっても、人の判断を迷わせるものは論外として、ひどい誤訳だらけのいいかげんの翻訳書から、所謂毒にも薬にもならない本まである。毒にならなければ、まあ良いではないかとも言えるが、読後の空しさと、貴重な時間を浪費させることを思えば、やはり出版されない方がよい。しかし世の中には随分と閑人もいる者だという感がなくもない。そうして本が閑つぶしの対象のようにもなってしまったのではないかとも思う。同じ閑つぶしならば、テレビの娯楽番組でも見ている方がましかもしれない。

私にとっては、本といえば文化財だという意識がつきまとう。少くとも人間形成にとって役立つものという観念がある。ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」に感激した若き日の思い出もある。その他いくつかの本との出会いが、私の精神の形成に如何に大きな作用を及ぼしたかを顧ることも出来る。高等学校に入学してドイツ語を学びはじめた青年は、まずゲーテの「ファウスト」を原文で読もうと思ったものである。わが家の書庫にも思い出の「ゲーテ選集」が、私の最初買った原書として保存されている。少くとも私にとっては、読書は教養のためであり、また学術研究のためのものであった。

しかし、私の育った時代は、まさに本の欠乏した時代であった。出版するための紙が配給制度であったり、外国の書物は何も入って来ないといった、現在の青年達には凡そ想像も出来ないような状態であった。「西田幾多郎全集」が戦後に出版されて、長い行列が続いた話を聞かれた人もあるであろう。私が大学に入学したのは40数年も昔のことであるが、その頃専門書を入手することは、殆んど不可能な状態であった。私の研究領域のものは、いくら古木屋を探しても、めったにお目に掛らないというのが実情であった。大学に入学した私の喜びは、図書館の研究書を、これから自由に読めるのだという感慨であった。大学での教授の講義よりも、授業料の何百倍、何千倍の図書を読むことの自由が許されているとは、何と有難いことかと思ったものである。

現在のような本の氾濫した時代では、私の経験した読書の感激などは、或いは味わうことが出来ないのではないかとも思う。勿論良書に出会えば、感激するに違いないが、まず良書と悪書を見分ける努力が要求される。公害問題をやかましく言いながら、出版物の公害を取り上げないのは妙である。良書と悪書を見分ける努力をしているうちに、本当の良書との劇的な出会いなど薄れてしまうようにも思われるのである。

かつて基礎ゼミのクラスを担当していた頃、私は一年間に3冊の本を選んで、それについての読後感のようなもののレポートを提出してもらった。学問研究の入門書乃至基礎的な文献である。また私の専門領域に関する基本的な図書のリストを配ったこともある。このような図書の選択についての手助けをしなければならない時代になった。私の指導に感謝した学生も多かった。また迷惑そうな顔付の学生も反面には居た。しかし出版公害にもなりかねない状況の中に在っては、やはり或る程度の読書指導は必要ではないかと思う。

随分と良い本が出版されていることも事実である。殊に専門書として、少し以前にはとても出版されなかったであろうと思われるような書物が、最近次々に刊行されることは、現代人にとって、やはり幸福なことだと思う。翻訳書にしても、相当専門的な書物が出版される。それだけ現代は研究者の層が広がり厚くなったのかとも思うが、また良心的な出版社の存在を証示するものであるともいえよう。最近の大学生は本を余り読まなくなったとも言う。これは一面では悪書の氾濫に起因するのかもしれない。しかし氾濫する程ではないにしても良書が数多く出版される幸福な時代に生きていることは確かである。私の過去の時代に比べれば、全く恵まれた環境の中に置かれているわけである。この恵まれた時代に自ら不幸を求める必要はないのではないかと思う。

鎖国下の漂流民

「びおりおてか」29号に、本学図書館所蔵の日本人漂流記関係資料が紹介されたが、今年11月には、本学図書館所蔵資料を中心に他の図書館の協力を得て、「鎖国時代の日本人漂流記展」と題して展示会を開催する予定である。今回はそれに先だって、漂流の概略について、簡単に紹介することにする。

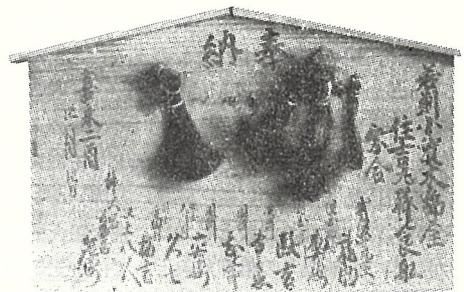
世界でわが国ほど海難の多い国もめずらしい。日本の沿海の気象、海象の悪条件により海難が発生しやすかったが、特に江戸時代には、幕府の鎖国政策によって外洋航海ができなくなり、沿海用の和船となり、外国の造船技術や航海技術の発達を助成しなかったため、海難事件を一層多発させたようである。かつては、対明貿易、南蛮貿易、朱印船による貿易で、中国大陸や東南アジアに就航した船はかなり大型船で、航海術も相当進んでいたようである。又江戸と大阪を中心とした物資輸送の帆船の就航時期が西風や北風の強い11月、12月に非常に多かったことも原因しているようである。漂流の発生場所としては、難所として有名な熊野灘、次いで遠州灘がずば抜けて多い。漂流船の多くは黒潮に乗って流され、破船して海の藻屑となるもの、



難船絵馬（全員手を合せ神に祈っている）

幸いにも短期間で近くの島に漂着するものもあれば、運悪く、世界でも例のない490日間も太平洋上を漂流のあげく、外国船に救出された督乗丸のような場合もあり、様々である。船が漂流して、船内に海水が浸水してくると、すっぽん（水鉄砲式のポンプ）で、ひどくなると樋などで汲み出すが、それでも危ない場合は、帆を下したり、荷打ち（積荷を海に捨てる）をして船足を軽くする。大波に翻弄されて楫を折られると、帆柱が大きくゆれて重心がとれなくなって横倒しになるため、船の安全のため帆柱を切り捨てる。殆どどの漂流船が荷打ちや帆柱を切り捨てている。帆柱を切ると船の安定を欠くので、たらしとって、船首から太い綱を三本くらい流すか、又は碇を流して、船尾を前に、船を流す。すべてこのようなことを行う場合、船頭の判断で命令するが、判断にまよった時におみくじでおうかがいをたてることもよくある。一寸四方に紙を切り、一枚毎に知りたいと思うことを書いて、丸めて紙玉をつくる。一升斛に八分目ほど米を入れて、その上に丸めた紙玉をのせ、大神宮を念じながら御板（玉串）をその上にかざすと、丸めた紙のうちの 하나가飛上って御板に付くので、その紙に書かれた内容がすなわち神のお告げである。又大事な所持品（たとえば鏡、脇差、刀等）を身代りとして海に投入したり、髻を切って神仏に加護を祈ることも広く行われた。信仰の対象としては、金毘羅大権現、伊勢大神宮、観音菩薩から各自の信仰する神仏など一定していないが、中でも船乗りの信仰対象としては金毘羅大権現がもっとも信仰されていた。強風や大浪を乗り越えても、飲水と食糧の欠乏は悲惨である。神力丸の漂流民は海水を飲んで一層苦しみ、神力丸、神社丸、土佐船の漂流民は小便さえ飲んでい。中には伊勢田丸、栄力丸、督乗丸など海水を蒸溜して飲み水を作った船もある。漂流中に死亡するものも少なくないが、漂着した時死亡するものの方が多くのも、極度の疲労の後、急に安心するからであろうか。19世紀に入ると、漂流中に洋上で異国船に救出される場合が急に増えている。これは太平洋での捕鯨が盛んになり、太平洋を航海する貿易船や捕鯨船が多くなったためである。洋上で救出された主な漂流船を挙げると、稲若丸（1806）、督乗丸（1815）、長者丸（1839）、永住丸（又は栄寿丸）（1841）、天寿丸（1850）、栄力丸（1850）、尾張小野浦の清五郎船（1861）等がある。多くは捕鯨船に救出され、又捕鯨船によって帰国の便船の機会を得ることも多かった。生き残った漂流民の中には、はからずも世界を一周することになったものもいる。寛政5年（1794）仙台若宮丸（24反帆、800石積、沖船頭平兵衛ら16人乗り、うち水主の津太夫、儀兵衛、左平、左十郎の4名のみ帰国）は石巻を発って塩屋崎沖で漂流、185日目にアリューシャン列島のオンデレイイッケ島へ漂着、オホーツクからイルクーツク、モスクワ、露都ペテルブルグへ、ここでロシア皇帝アレクサンドル一世に謁見、この時シベリアに残留した伊勢の神昌丸の新蔵が通訳として活躍した。帰途は漂流護送という外交手段によって日本との通商を求めため、ロシア使節レザノフの乗った軍艦ナデジュダ号に乗り、大西洋から南アメリカの南端ホーン岬を迂回し、ハワイからカムチャッカを経て10年ぶりに長崎へ帰ってきた。日本人の船乗りとして、はじめて世界を一周した男たちといえる。このほかに、天保3年（1832）の宝順丸の岩吉、久吉、音吉、天保12年（1841）の土佐宇佐船の万次郎がいる。運よく救出さ

れ、便船を得て帰国できたものがある反面、望郷の思いにかられながら、帰るに帰れなかった漂流民も少なくない。前述の宝順丸の岩吉、久吉、音吉、の3人は、天保8年(1837)モリソン号で江戸湾や鹿児島湾まで来ながら漂流民の受取りを拒絶され、砲撃を加えられたため帰国することができなかった。なお岩吉ら3人はモリソン号に乗る前、マカオで帰国を待つ間、3人の世話に当たったイギリス商務庁の中国語通訳官で宣教師ギュツラフによる聖書の日本語訳に協力、「約翰福音之伝」および「約翰上中下書」を1837年シンガポールで出版した。これが最初の日本語訳聖書である。聖書の日本語訳を手伝ったのはこの3人だけではなく、肥後船の直船頭、原田庄蔵もウィリアムズに協力、「馬太伝」を完成した。又、原住民の女と結婚して帰国しなかったフィリピン群島北部のバタン島へ漂着した尾張の大野浦船の水主、五郎蔵や土佐宇佐船の寅右衛門。北方に漂流、ロシア人に保護された元禄8年(1695)の大阪船(15人乗り)の伝兵衛はペテルブルグの日本語学校の教師に任命。(日本語学校は1702年、ピョートル大帝によってペテルブルグに開設されたが、1753年からイルクーツクへ移され、1816年6月に廃止)さらに宝永7年(1710)にカムチャッカに漂着した10人の中のサニマ(三右衛門?)は伝兵衛の助手に、そのサニマの子といわれるボグダーノフは同校主事として働き、ロシア最初の日本語辞典等を編纂した。彼はペテルブルグ大学の図書館次長にもなった。享保14年(1729)カムチャッカ南岸に漂着したゴンゾー(権蔵)とソーズ(宗蔵)は同校に勤め、ボグダーノフを助けて日本語学書を著している。延享元年(1744)、竹内徳兵衛船の多賀丸(1200石積、17人乗り)の生き残りの10人はペテルブルグに送られてロシア語を学び、イルクーツクの日本語学校の教師になっている。その一人、三之助の子供、タターノフは露和辞典を著したほか、欽定大辞典の編集にも協力した。天明3年(1783)の伊勢の神昌丸(沖船頭光太夫)の漂流者のうち、新蔵と庄蔵の二人は、イルクーツクの日本語学校の教師に任命された。新蔵は重病のため、信仰を求めてロシア教に入り、ニコライ・ペトロウイッチ・コロツギンと改名した。幸い全快したがヤソ教に入っているため帰国を断念して永住することにした。彼には「日本および日本貿易について、また最新の日本列島の歴史と地理」というロシア語の著作がある。日本人の書いた最初の図書といわれる。又庄蔵は凍傷で片脚を切断手術したため、帰国をあきらめ、ロシア教に入ってフィヨドル・シトニコフと改名した。しかし、九死に一生をえて、やっとの思いで長崎(外国船に開かれた唯一の港であったため、大部分が長崎へ送られた)へ帰ってきた漂流民にも嚴重な取調らべが待っていた。漂流者は犯罪容疑者扱いにされ、揚り屋(牢屋の一種)に入れられ、絵踏され、キリシタンへの改宗の有無、密貿易や密入国の有無、武器など禁制品運送の有無などを中心に、長期にわたる過酷な取調が行われ、そのために、帰国を前に苦悶の余り発狂する者や、自殺する者も出たほどである。やっとならば取調らべが済んで、生国に帰った後も要注意人物として警戒され、異国の様子を口外しないこと、船に乗らないこと、他領に住んだり、商いをして歩かないこと、死した時は届け出ること等、漂着した国や時代によって多少の違いはあるが、心身共に大きな拘束を受けていた。幕府が嚴重な鎖国政策をとっても、外国船の漂着や来航を避けることができないため、対外交渉への対処に、海外事情を知っておく必要があり、「オランダ風説書」や漂流者の見聞が情報源となった。そのため漂流者を引見し、家臣に尋問させたり、学者に命じて詳細な記録を編さんさせるようにもなった。桂川甫周の「北槎聞略」、大槻玄沢の「環海異聞」、川上親信の「北槎漂譚」、前川文の「亞墨新話」、大槻盤溪の「呂宋国漂流記」、遠藤高環の「時規物語」、村上範致、菅生景福、稲熊元長の「漂流聞書」等がある。記録を公表することは固く禁じられていたが、知識階級は漂流記録をひそかにつぎつぎと転写して海外事情を知る手だてとした。そのため今日、漂流記録は意外に多く残っており、したがって大半が写本である。江戸時代に出版されたものとしては次の5点だけである。1. 筑前の伊勢丸の水主、孫太郎の見聞を書いた「南海紀聞」5巻 青木興勝著 文化14年(1817)。2. 奥州の大乗丸が安南(今のベトナム)に漂着したものを夢に託して述べた「南飄記」5巻 枝芳軒著 寛政10年(1798)。3. 万次郎漂流譚 純通子著(仮名垣魯文の別号) 嘉永6年(1853)。4. 摂津の永住丸(又は榮寿丸)の水主初太郎の談話をまとめた「海外異聞一名亞墨利加新話」5巻 靄湖漁叟撰 嘉永甲寅(1854)。5. 日本人の漂流記として最もよく知られたジョセフ・ヒコの「漂流記」上下2冊 文久3年(1863)。



奉納箱(遭難の際に箱を切って祈ったが、助かって一枚の額にまとめて奉納したもの)

- 参考文献 1. 日本人漂流記 川合彦充著 社会思想社 昭42(現代教養文庫 598)
 2. 日本漂流誌 相川広秋著 日本漂流誌刊行会 昭38
 3. 世界を見てしまった男たち 春名徹著 文芸春秋 1981
 4. っぽん音吉漂流記 春名徹著 昌文社 1979
 5. 日本人とロシア人 中村新太郎著 大月書店 1978

大学生生活と図書館

文学部（1983年3月卒業）三好正文

同志社大学に入学して、はや4年。今、胸に残るのは少しの満足と、少しの後悔と。でも、本当に楽しかった。そして、この4年間に、この図書館とも多くの関わりをもつ事ができた気がする。試験前や、レポートの際の関わりが一番、多かったが……！そして今、胸をよぎるのは、もっともっと利用すればよかったなという後悔にも似た気持ち。前に一度、図書館実習の時、閉架の書庫に入れてもらった事があるが、その時、同志社大学図書館の蔵書の素晴らしさに驚き、それを誇りにも感じ、けれどもその何百分の一も読んでいない自分自身をはずかしく思った事がある。本当に、もっともっと利用したかったと思うこの頃である。

大学生は「自由」だと、よく言われる。そう、それは確かにあたっているし、事実、僕自身、自由を満喫した4年間だった。でも、「自由」って一体、何なのかな!? 僕たち大学生は、きっと穏やかな大海原に浮かぶ船のような存在——その大海原を、自由に漂い、青春を謳歌し……でもいつかは、船の進む方角を決めなくてはならない。そして、海図と羅針盤でその船を動かすキャプテンはまぎれもなく自分自身！大学生生活は、やっぱりその方角を決める為の「知的放浪」の4年間であるべきだし、図書館も、その意味で大いに利用したらいいと思う。僕自身？ 僕自身の4年間はとても「知的放浪」などとは呼べないけれど、それでも福祉に興味をもって本を読みあさった3回生の時、あの冬の図書館は忘れない。

僕は、同志社大学図書館が大好きだ。同志社のアカデミックな雰囲気にとってもマッチしているし、とても心落ち着く場所の一つ。でも、卒業も近い今となっては、すべてが懐しさの中にある。そして、僕は読書が大好きだ。書物から得たものは、友から得たものと同じくらい計り知れなく大きい。もしこの僕に、現在の社会状況に対する批判精神が少しでもあるとすれば、それはこの図書館の書から得られたものだし、もしこの僕に、少しでも自分自身に対する自信があるとすれば、それもこの図書館の書から得られたものだと思う。でも、もっと利用したかったな、それが今、一番思う事。——この原稿を図書館の隅で書いている今は冬。これが「びぶりおてか」に載る頃には、また春が巡り来ていることだろう！輝く春。京都の大学生生活の中で、自然と遊び、友と出会い、そして図書館の書を読みあさる事で自らを輝かせて下さい。素晴らしい4年間をおくって下さい。

商学部（1983年3月卒業）増田祐子

泣いて笑った大学時代が終わりを告げようとしている。DOSHISHA、そのなつかしい響きの中に浮かびあがる今出川キャンパスや新町キャンパス。狭いキャンパスに乱立する赤レンガの建物の中で、私にとって最も思い出深いのは、明德館でもなく、また商学部の至誠館でもない。それは図書館である。卒業を目前にひかえた今、私は次のように断言できる自分自身をとてうれしく思う。この同志社大学図書館がなかったら、きっと無事に4年間で大学を卒業できなかったであろう、と。後輩たちにも、このように言えるくらい十分に図書館を利用してもらいたいと思う。

思えば、図書館には本当にお世話になった。特に、レポート試験の時は図書館のありがたさをしみじみと感じた。また、暑い7月の前期試験の時は、冷房している図書館で快適に勉強することができた。磁気方式を導入して荷物を持ち込めるようになってから、開架閲覧室や雑誌・参考図書室で勉強する学生が増え、以前より少し騒がしくなったように思えるが、荷物をロッカーに入れる必要がなくなったのでとても便利になったと思う。図書館司書課程を履修していることもあり、図書館とはとてもなじみが深かった。4回生の9月には本学図書館で4日間の実習を経験する機会にも恵まれた。図書館の業務に実際に携わることにより、今まで利用者側から見ていた図書館を、図書館員側から考察することができた。図書館員の方々が利用者である私たち学生のために陰で努力してくれていることを忘れずに、マナーを守り有効に図書館を活用していかなければならない。私は、図書館学の講義で文献探索の方法を勉強していたので、卒業論文を書く時などにとっても役立った。友人の中には、4回生の後期で卒業論文を書く段階になり、はじめて、閉架図書の利用方法を知った人もいた。同志社大学には立派な図書館があるのだから、室の持ち腐れにならないように、みんなに有効に利用してもらいたいと思う。

4年間、毎日のように通っていた図書館。一生懸命に勉強したこともあったし、友人との待ち合わせの場所として利用したこともあった。私の大学時代のさまざまな思い出を抱いたまま、びくともせずに堂々と立っている図書館。私にとって大きかった4年の年月の流れは、そこには全く見られない。今、心より、ありがとうの言葉を贈りたい。同志社大学図書館に。

民俗学 (主として) に関する二次文献について

最近「民俗ブーム」という言葉をよく耳にします。そこで今回は主として民俗学、一部民族学 (文化人類学・社会人類学) を含めた二次文献を紹介することにします。

日本民俗学は、柳田国男がその土台を築いて以来、今日までめざましい進展をとげてきました。民俗文化の研究、民間伝承の調査分析など民俗学プロパーに関する文献はもとより民族学 (文化人類学・社会人類学)、地方史学等の文献を加えれば膨大な量になるものと思われまふ。しかしながらこのおびただしい先学の研究を十分に把握することが可能な文献目録は、昭和20年代の (民俗学研究所編「分類民俗学文献目録」) をのぞいては、今日まで充分なものは久しく作成されていないのが実状でしたが、ようやく最近になって昭和30~40年代の空白をうづめるべくこれら先学の成果・業績を総覧できる文献目録が公刊されました。それは「日本民俗学文献総目録」 (日本民俗学会編 弘文堂 昭55) であり、これは民俗学と隣接諸科学領域を網羅した文字通り包括的な文献目録であります。

又、大方の著書・論文に解題を加え、今日の民俗学研究の水準をもとに評価を与えている解題書誌として「民俗学文献解題」 (宮田登「ほか」編 名著出版 昭55) があります。多くはこれらを参考にしていただきたいが、今回は本館所蔵のもので、民俗学全般を取り扱っているものに限定し、下記の要点に従って掲載することにしました。

1. 配列は原則として書名のABC順とした。
2. 民俗学関係の事典・辞典類は、それぞれ固有の特色があり、引用文献、参考文献も豊富に収録されているので可能なかぎり掲載し、便宜的に集めることにした。
3. 民俗学関係の専門書誌は数少ないので単行書や全集の一部分の文献目録なども比較的まとまっているものについては掲載した。
4. 民俗学発展に足跡を残す民俗学者の個人全集には必ずといっていいほど年譜・著作目録等が収録されており、個人書誌として使用できる。今回は「定本柳田国男集」と「折口信夫全集」のみにとどめた。

1. 文学・哲学・史学文献目録 V 日本民俗学篇

日本学術会議編 昭30 (㊟028; N)

1945~1954の10年間の国内発表論文を収録。項目の配列は、全体を年次別に分ち、同一年次内は各分類部門ごとに著者名の五十音順によっている。

2. 文化人類学研究文献要覧 1945~1974 (戦後編)

(20世紀文献要覧大系7) 佐野 眞編 日外アソシエーツ 昭54 (㊟028.389; B)

1945年以降30年間に発行された単行書約2300件とその間に発表された雑誌・紀要類の論文約8700件そのほかに参考図書約420件あわせて約11420件を中心に編集され第1部「参考図書の案内」第2部「文献目録」からなる。さらに採録された文献を効率的に探索するため「件名索引」と「著者名索引」を付している。巻末に「収録誌名一覧」を付している。

3. 文科系文献目録 XIII 文化人類学篇

日本学術会議編 昭37 (㊟028; N-2)

1945~1961の16年間の日本国内で発表された文化人類学関係の文献を論文・刊本の別なく約3000件を収録。構成は13項目別と22地域別に分類し、その中を著者の五十音順に配列。

4. 分類民俗学文献目録 其1 (昭和20年8月~昭和23年12月) <民俗学研究所編 民俗学研究1 日本民俗学会 昭25 巻末P.1-26> (P380.1; M5)

5. 分類民俗学文献目録 其2 (昭和24年1月~12月) <民俗学研究所編 民俗学研究2 日本民俗学会 昭26 巻末P.1-15> (P380.1; M5)

6. 分類民俗学文献目録 其3 (昭和25年1月~12月) <民俗学研究所編 民俗学研究3 日本民俗学会 昭27 巻末P.1-20> (P380.1; M5)

7. 分類民俗学文献目録(昭和26年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学1-1 日本民俗学会 昭28 卷末P.1-20> (P382; N2)

8. 分類民俗学文献目録(昭和27年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学1-4 日本民俗学会 昭29 卷末P.1-22> (P382; N2)

9. 分類民俗学文献目録(昭和28年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学2-2 日本民俗学会 昭29 卷末P.1-18> (P382; N2)

10. 分類民俗学文献目録(昭和29年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学2-4 日本民俗学会 昭30 卷末P.1-16> (P382; N2)

11. 分類民俗学文献目録(昭和30年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学3-4 日本民俗学会 昭31 卷末P.1-18> (P382; N2)

12. 分類民俗学文献目録(昭和31年1月~12月) <民俗学研究所編 日本民俗学4-4 日本民俗学会 昭32 卷末P.1-17> (P382; N2)

13. 伊波普猷 年譜・著書論文目録

外間守善・比屋根照夫編 伊波普猷生誕百年記念会 昭51 (㊦289.3; I37)

年譜は伊波普猷の事跡を編年的に編集あわせて伊波普猷の学問的・思想的諸活動を時代的に展望。目録には、伊波普猷の著者・論文・随筆・自作オモロ・琉歌などを収録。

14. 民俗調査研究の基礎資料(講座・日本の民俗 別巻)

講座日本の民俗編集部編 有精堂 昭57

(㊦382.1; K10)

講座日本の民俗全9巻の別巻として刊行されたもので、内容は「民俗調査要項サンプル」「民俗関係文献目録」「民俗調査参考資料」から構成されている。文献目録は分野別と地方別に分かれており、収録文献は、日本民俗学に関する単行本でいずれも昭和54年までに刊行されたものに限っている。

15. 民俗学文献解題

宮田 登「ほか」編 名著出版 昭55

(㊦028.38; M2)

包括性のある文献目録のなかで唯一の解題書誌。民俗学研究を志す人々のために、先学の研究を十分に把握出来るよう、大方の著書・論文に解題を加えている。収録は、明治年代から昭和51年末日までに発行された日本民俗学の重要な著書・論文(雑誌掲載・単行本所収とも)・報告書に民俗学に影響を与えた隣接諸科学の文献を加え、そのほとんどについて解題している。巻末に書(論文)名索引・著(編)者名索引を付している。

16. 民俗学方法論文献目録

野口武徳・宮田 登・福田アジオ編 <現代日本民俗学I 三一書房 昭49 P.260-288>

(㊦380.1; N3)

民俗学の課題、対象、方法、諸科学との関係、教育との関連などを論じた論文・著書および以上の内容を含んだ研究史や研究動向紹介の論文を著者別に配列。1973年12月末までに刊行されたものを対象としているが1945年以前については、代表的なもののみ。今後の民俗学の方向を考えようとする人々が、自ら研究史的整理をする際の参考に最適。

17. 日本民俗誌大系 全12巻

池田弥三郎「ほか」編 角川書店 昭49-51

(㊦382.1; N12)

沖縄・九州など9地方別に分けて基本的な民俗誌類を収録している。10巻~12巻は未刊資料で主として雑誌に掲載されたものである。各巻末に参考資料文献が付されている。

18. 民俗学関係雑誌文献総覧

竹田 且編 国書刊行会 昭53 (㊦028.38; T)

民俗学専門雑誌はもとより民族学(文化人類学・社会人類学)・民具学・風俗史学・方言学など隣接諸科学の雑誌、さらに郷土研究総合雑誌について巻号別文献目録を編纂し、あわせて著者名索引を付している。特定論文を確かめるにはきわめて便利。収録は昭和51年12月刊行の巻号までを原則としている。将来続編が編纂される予定。

19. 民族学関係雑誌論文総目録1925~1959

日本民族学協会編 誠文堂新光社 昭36

(㊦016.36; N)

昭和初年以來の我国民族学関係9誌の各刊号以降1959年までの掲載論文を収録し分類別および地域別に編集している。

20. 民俗学のすすめ (日本の民俗11)

池田弥三郎, 宮本常一, 和歌森太郎編 河出書房新社
昭51 (郵382.1; N)

民俗学の入門案内書としての意図のもとに内容構成
されており, 民俗学の歴史・研究方法を述べたもの。

21. 長岡博男文庫蔵書目録

石川県立郷土資料館 昭50 (郵029.9; N 6)

同館に寄贈された長岡博男所蔵の民俗関係資料の蔵
書目録。

22. 日本民俗文化大系 全12巻

池田弥三郎, 上田正昭, 宮本常一編 講談社 昭53—
54 (郵380.8; N)

日本の民俗学の発展にかかわりのある17名の人物に
ついての研究書。各巻末に被伝者の「年譜」並びに「
研究文献目録」を付している。

23. 日本民俗地図

文化庁編 財団法人国土地理協会 昭44—
(郵382.1; B 3)

民俗資料の保護に資する目的で作成したもので全国
の民俗資料の趨勢を概観できるように民俗事象を内容
項目別に分けて作成された全国分布図とその解説編と
からなる。

24. 日本民俗学文献総目録

日本民俗学会編 弘文堂 昭55 (郵028.38; N)

民俗学と隣接諸科学領域を網羅した文字通り包括的
な文献目録。明治から昭和50年末までに発表された日
本民俗学に関連する書籍, 論文, 調査報告, 雑報, 学
会レジュメ, 書評, 書誌紹介等, 和文の文献を収録し
ている。なお付録として「民俗学関係定期刊行物一
覧」及び「民俗学関係著作集内容一覧」を付してい
る。

25. 日本民俗学大系13 日本民俗学の調査方法・文献目
録・総索引

大間知篤三「ほか」編 平凡社 昭35
(郵382.1; N 5)

民俗調査法についての論文10点につづいて205頁を
「民俗学文献目録」として掲載。明治以降の民俗学関
係の単行書・雑誌論文など約1万点を分類し論著の50
音順に配列したもので書誌として内容豊富である。

26. 日本の民俗 全47巻

文化庁文化財保護部監修 最上孝敬「ほか」編
第一法規出版 昭46—昭50 (郵382.1; N 6)

各都道府県別の調査や研究の成果を総合的に集約し
たもので県ごとの民俗を知る上で便利。各巻末に参考
文献目録を付している。

27. 日本史文献年鑑 1975年版—

地方史研究協議会編 柏書房 昭49—

全体を「文献目録編」「資料編」の2編に分けてい
る。「文献目録編」中, 時代・分野別文献(民俗学)
の項目がある。但し1982年版以降は除外された。

28. 折口信夫全集 全31巻・別巻1

折口博士記念会編 中央公論社 昭29—昭34
(郵910.8; O)

民俗学者・国文学者である著者の全業績の集大成。
民俗学関係は, 第2, 3巻の古代研究他10冊余りであ
る。第31巻に年譜・著述総目録が収められている。

29. 史料館所蔵民族資料図版目録1—5

文部省史料館 昭42— (郵028.38; M)

同館所蔵の民族資料のうち, 整理を了えたものにつ
いて形態を写真によって示し, それに収録当時の記録
を摘記したもの。

30. 定本柳田国男集 全31巻・別巻5

定本柳田国男集編集委員会編 筑摩書房 昭37—46
(郵380.8; Y)

日本民俗学研究に必須の文献。別巻第5巻には細か
な総索引と柳田国男の全著作年表が収められており,
柳田国男研究の座右の書として利用価値がある。

31. 柳田文庫蔵書目録

成城大学柳田文庫蔵書目録編集委員会編 成城大学
昭42 (郵029.9; Y 2)

現在成城大学図書館に所蔵されている柳田国男の2
万点近い収集文献の目録。

32. 柳田国男研究文献目録 (中島河太郎編)

<柳田国男研究 神島二郎編 筑摩書房 昭48>
(郵380.1; Y—10)

柳田国男論に関する文献目録で書評・解説の類はも
ちろん, 柳田民俗学に関する文献も収録されて明治39
年—昭和48年まで年次順に配列している。柳田国男研
究のためには大変参考になる。

33. 文化人類学事典

祖父江孝男, 米山俊直, 野口武徳編 ぎょうせい
昭52 (叢389; B 9)

文化人類学の学問領域では、はじめての事典。事典の編成は文化人類学の基礎的なものを13の領域に分け、必要に応じて細分化している。各章末に50音順による用語解説をおく。さらに第11章「異民族とのつきあい方」と第12章「現代日本文化辞典」という50音順用語解説をつけくわえているのは、この本の特色で日本の現代文化を文化人類学の立場から眺める橋渡しをしようとする意図がある。なお参考文献は本文項末にある。

34. 民俗調査ハンドブック

上野和男「ほか」編 吉川弘文館 昭49
(叢380.3; M 3)

民俗調査がかかえこんでいる技術的な難問題を解決できるように、調査地に携行して必要な事項を参照利用できるように編集。第6章(P.251—278)に「民俗調査文献目録・解題」を掲載。

35. 民俗研究ハンドブック

上野和男「ほか」編 吉川弘文館 昭53
(叢380.3; M 4)

「民俗調査ハンドブック」の姉妹編。日本民俗学の研究成果を研究史的に整理し、今後の課題を提示している。研究成果の紹介は本文中に研究者の氏名と発表年次で示され、その文末に「参考文献」として一括して示されている。そのことにより分野別の文献目録の役割を果たさせようとしている。

36. 民俗の事典

大間知篤三「ほか」編 岩崎美術社 昭47
(叢380.3; M 2)

日本民俗学の研究入門事典。日本民俗学の研究範囲を20の分野にわけそれぞれ50項目をとりあげ、互に関係のある項目をならべて連続する形式にしているのが特色。巻末P.388—429に昭和45年12月までに発行された民俗学関係の単行書を基本文献と地方別文献にわけて約1450点を紹介。

37. 民俗学辞典

民俗学研究所編 東京堂 昭26 (叢380.3; M)
民俗学の基礎概念や民俗事象などを中項目中心の50音順に排列して解説。これを読むことによって民俗学全体の内容をある程度把握することが可能である。各項目末尾に重要なものを参考文献として付している。

38. 日本民俗事典

大塚民俗学会編 弘文堂 昭47 (叢380.3; N 3)

民俗事象の重要かつ学的普遍性を帯びるものを抽出して50音順に配列して解説した事典。巻頭に項目分類目次があり、見出し全項目を分野別に分類してあり、検索が可能である。各項目末尾に必要な文献名を挙げている。

39. 日本民俗資料事典

祝 宮静, 関 敬吾, 宮本馨太郎編 第一法規 昭44
(叢380.3; N 2)

文化財保護法の定めるところにより民俗事象を11部門に分類して有形・無形の「民俗資料」について系統的に解説した民俗事典で民俗学の概説書・入門書としての性格をもつ。なお昭和54年に「日本民俗文化財事典」(叢380.3; N 6)と書名を変更。

40. 日本社会民俗辞典 全4巻

日本民族学協会編 誠文堂新光社 昭27—35
(叢380.3; N 5)

文化人類学の研究領域を基準とし、日本の民族文化に統合的展望を与える意図のもとに編纂した辞典。各項目毎に参照と文献を付している。

41. 総合日本民俗語彙 全5巻

民俗学研究所編 平凡社 昭30—31 (叢380.3; S)

明治以後に報告採集された民俗語彙をカタカナで50音順に配列した大民俗辞典で民俗語彙の分布や意味の差異を知る上で便利。第5巻は総索引・文献目録にあてられており、50音順索引、部門別索引、主要引用文献目録に分かれている。

42. 全国ふるさと博物館ガイド

観光資源保護財団(日本ナショナル・トラスト)編
柏書房 昭52 (叢069; Z)

「全国民俗博物館総覧」の内容とはほぼ同じで版型をB5から携帯に便利なB6に縮小し若干の増補を加えている。

43. 全国民俗博物館総覧

観光資源保護財団(日本ナショナル・トラスト)編
柏書房 昭52 (叢380.6; Z)

民俗資料を収集・保存する公私立民俗博物館450カ所の収蔵施設を紹介。

実例を中心とした

資料のさがし方 —23—

今回は1982年12月までに受付けた質問を紹介します。今回は回答の他に実際の調査の過程を紹介しました。調査方法はいく通りもありますので、ここに書いた調査方法がベストのものではありませんが一例として何か資料をさがす時に役立てば幸いです。

〔質問例 1〕

谷崎潤一郎著の『鴨東綺譚』の所在。

<調査>

①『谷崎潤一郎全集』を図書館で所蔵しているのでこの全集の中に収録されていないか。→「谷崎潤一郎全集：目次」を利用してさがしたが見当らず。（参考室に個人全集の目次をコピー、製本して備えてあります。ただし新分類900（文学）部門のみ）

②文学全集類に収録されていないか。→『現代日本文学綜覧シリーズ 2：全集作家名綜覧，3：全集作品名綜覧』（028.91:G）で調査。→作家名：谷崎潤一郎，作品名：鴨東綺譚の両方よりさがしても見当らず。→全集類には収録されていないらしい。

③『鴨東綺譚』がいつごろ執筆，出版されたものかを調査。→『日本近代文学大事典』，『新潮日本文学小辞典』，『近代日本文学辞典』，『日本文学年表』，いずれも記載なし。『研究資料現代日本文学1：小説・戯曲』（910.28:K17）の谷崎潤一郎の項に“『鴨東綺譚』（昭31）は中絶した作品である”との記述あり。

④“中絶した作品”をくわしく調べるために谷崎潤一郎の著作目録，年譜，伝記がないかを『人物書誌索引』（027.38:J）を利用して調査。（伝記については被伝者名より著者目録でもさがせる）→『文芸読本谷崎潤一郎』（910.28L:T3b）“昭和31年 鴨東綺譚を週刊新潮（6回にて一部完）に発表”，『日本近代文学大系 30』（918.6:N3）“昭和31年2～3月「鴨東綺譚」（モデル問題で中絶）を週刊新潮に発表”，『谷崎潤一郎の世界』（910.28L:T3:2）“昭和31年 週刊新潮（2月19日号～3月25日号）6回連載の「鴨東綺譚」モデル問題で中絶”，『伝記谷崎潤一郎』（910.28L:T3n）“鴨東綺譚は「週刊新潮」の昭和31年2月19日号（創刊号）から3月25日号まで6回連載されて中絶になった。モデルのプライバシー問題として抗議があったためである。6回目の末尾に「鴨東綺譚」の筆者は，ここで読者諸君に諒解を求めなければならぬと中止の趣旨を書き添えている。……”

これらの資料の記述により，モデル問題で抗議を受け連載を中止したものであり，そのため単行本としても出版されず，全集にも収録されなかったものと思われる。念のため『出版年鑑』（025.1:S），『全日本出版物総目録』（025.1:Z）で昭和31年以後のものを調べたが見当らず。→「週刊新潮」に掲載のものを読むしかない。

⑤「週刊新潮」2月19日号～3月25日号の所在を調査。→『京都府立総合資料館所蔵遂次刊行物目録 昭和56年』（027.5:K2A-2a）に「週刊新潮」を創刊号（2月19日号）より所蔵とあり。

<回答>

谷崎潤一郎著「鴨東綺譚」は「週刊新潮」の2月19日号（創刊号）から3月25日号まで6回にわたり連載されたものです。単行本では出版されていませんので「週刊新潮」に連載のものを利用して下さい。「週刊新潮」は同志社では所蔵していませんが京都府立総合資料館に創刊号からあります。

〔質問例 2〕

全米教育協会編集の「1970年代以降の学校教育」（英文原書名よりの直訳）の日本語版をさがしています。日本語版の書名は不明です。

<調査>

①編者名より著者目録で調査。全米教育協会の英語つづりを調査→『世界教育事典』（370.3:S4-1a）にあり。National Education Association (of the United States of America) →著者目録を検索→見当らず。念のため全米教育教会：Zembei kyōiku kyōkai よりさがしたが見当らず。

②日本で出版されているので『出版年鑑』（025.1:S）で調査→『出版年鑑』の索引は書名又は著訳編者索引で団体名からは検索出来ない。とりあえず直訳書名「1970年代以降の学校教育」より検索したが見当らず。各年の教育の

分類のところを順々に見ていけば見つかるかも知れないが手間がかかるので最後にまわす。

③翻訳図書目録である『Index translationum』(027.34:I)で調査。直訳書名からみて1960年代後半以後に出版と思われる→Vol. 29(1976)の索引でNational Education AssociationがJPN(日本)の項に見つかる。→『Index translationum』の記述:Yomigaerugakkô/Yamamoto Tadashi/Tokyo/Simul Shuppankai 1976/Eng. title: School for the 70's and beyond→原書名からみてこの資料と思われる。→1976年に出版ということがわかったので『出版年鑑』1977年版(1976年の出版物を収録)で確認→日本語書名「よみがえる学校」山本正訳サイマル出版会。

④書名、訳者名がわかったので書名目録、著者目録で所蔵調査したが見当らず→必要な資料と思われるので学生購入希望図書として手続。

<回答>

日本語書名「よみがえる学校」でサイマル出版会より出版されています。図書館では所蔵していませんでしたので購入します。閲覧出来るまで数日かかりますので改めて連絡します。

〔質問例 3〕

Holmes の「Common law」P.32~33に引用されている Sir Travers Twiss と Pardessus (両者とも法律家ないしは法律関係の人)について知りたい。

<調査>

①人名辞典を調査→『岩波西洋人名辞典』,『世界人名辞典』,『大人名事典 外国篇』など日本語の人名辞典には見当らず。『Dictionary of national biography』(283.3:D-1a)の第19巻, P. 1320~1323に Sir Travers Twiss についての記載がある。Pardessus については見当らず。『人物文献索引 法律政治編』にも記載なし。

②調査対象者の専門分野の事典で調査→『法学辞典』,『社会科学大事典』などには記載なし。『The Oxford companion to law』(320.5:O) P.1245に Sir Travers Twiss について記載あり。

<回答>

Sir Travers Twiss については『The Oxford companion to law』(320.5:O 参考室)の1245ページと『Dictionary of national biography』(283.3:D-1a 参考室)の第19巻, 1320~1323ページに記載があります。Pardessus については『The Oxford companion to law』の916ページに記載があります。日本語の資料については見当りませんでした。

〔質問例 4〕

“糸屋文庫”の所在とその目録があるかどうかを知りたい。

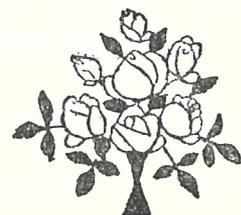
<調査>

①文庫の所在を調べる資料→『全国特殊コレクション要覧』(018;Z 2 参考室),『全国図書館案内』(010.35;Z 参考室)がある。『全国図書館案内』は“文庫”を所蔵している図書館がわからないと利用出来ない。(特定の図書館にどのような文庫があるかを調べるには便利)『全国特殊コレクション要覧』は文庫名より検索出来る。これによると“糸屋文庫”は幕末の文献560点を収めたもので、同志社大学人文科学研究所で所蔵。目録は人文科学研究所発行の『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』に収録。

②目録の所蔵調査→『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』(029.6:D)参考室にあり。

<回答>

“糸屋文庫”は同志社大学人文科学研究所で所蔵しています。目録は『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』(029.6:D 参考室)に収録されています。



キリシタン高札

江戸幕府はその当初から高札による法令公布を重視していました。高札は、中世末期から用いられていましたが、江戸時代、警察力の不足を庶民の協力——主として訴人——によっておぎなおうとする考えから重用されるようになったものです。中でも、庶民に対して高札の存在を最も強く意識させることになったのが、寛永3年（1626）以来あいついで立てられたキリシタン高札でした。「かくし置き他所よりあらわるるにおいては、其所の名主五人組まで一類共に罪科に行わる……」と云う文面以上に、そこにかけられた懸賞金の額が、幕府のキリシタン弾圧のきびしさを実感させたものでしょう。中には、高札のかたわらに現銀を掲げたものもあったようです。

キリシタン高札は寛永3年に始めて立てられて以来、数回の立て替えがあり、懸賞金の額も増加されましたが、延宝8年（1680）のそれでは、伴天連の訴人に銀500枚、いるまんの訴人に銀300枚、同宿並びに宗門の訴人に銀50枚又は100枚があたえられることになり、この金額は、天和2年（1682）および正徳元年（1711）の高札でもそのまま踏襲されています。当館で所蔵しているものは、この天和2年と正徳元年のもの各1枚ですが、この2回の高札はキリシタン高札の中で特に重要なもので、正徳のものは、それ以後幕末まで140年間、文面も金額もほとんど変わらずに引つがれた謂わば、キリシタン高札の基準版となったものです。前述したように高札制度の依って来る所に警察力の弱さがあり、火付盗賊など、当時の重罪犯を捕えるためには密告の奨励が必要だったわけですが、これらにもまして、キリシタンの摘発は大変困難でした。彼等の信仰は強固で、隠れキリシタンと云う言葉で知られているように、巧みに偽装し、容易に実体をあらわさなかったからです。幕府は、踏絵、宗門改帳などあらゆる手段を尽してその摘発につとめました。火付、盗賊などの高札でも懸賞金を明示したのもありましたが、貞享2年（1685）の鉄砲札以外はいずれも銀100枚を超えるものはなく、キリシタン高札のみがとびぬけて高額であったのは、幕府のキリシタンに対する恐怖心もさることながら、その摘発の困難さにもよったものと思われる。

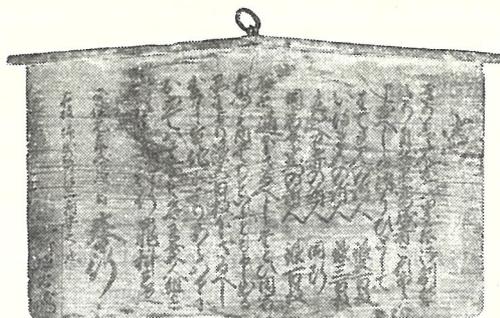
徹底した幕府の弾圧によって、表面上全く消えたかに見えたキリシタンは、なお多くの信者が各地に潜伏して明治初期に及びました。宗門改役は寛政4年（1792）に廃止されましたが、禁制諸制度は引続き行われ、踏絵が安政条約によって廃止されたほかは、明治に入っても続きました。明治新政府も、当初高札の存在意義を認めていましたが、これが時代の要請に適合しないことを悟り、明治6年（1873）2月24日太政官布告によって高札制度はなくなり、法制としてのキリシタン弾圧も終止符を打つことになったものです。

今回紹介した資料は図書館としては異質のものようですが、このような博物館的な資料も図書館にとっては重要なもので、その収集は図書館の大きな任務の一つです。特に大学図書館においては、その大学の研究分野に深くかかわるこのような資料の収集保存に努力する必要があると思います。

（参考資料 服藤弘司著 幕藩体制国家の法と権力 第1巻 322.15;H 6(1)）

（帆足正規）

訂正：びぶりおてかNo.32 16頁28行目の明日鉄男は明田鉄男の誤りです。お詫びして訂正します。



定
 きり志たん宗門ハ累年御制禁
 たり自然不審成者これあらは
 申出へし 御ほうひとして
 はてれんの訴人 銀五百枚
 いるまんの訴人 銀三百枚
 立かへり者の訴人 同断
 同宿並宗門の訴人 銀百枚
 右之通下さるへし たとひ同宿
 宗門の内たりといふとも申出る
 品により銀五百枚下さるへし
 かくし置 他所よりあらはるゝに
 おあてハ 其所之 名主五人組迄
 一類共に可被行罪科者也
 正徳元年五月 日 奉行
 右被仰出御出訴暨可相守之者也
 竹垣三右衛門

“びぶりおてか”

同志社大学図書館報 No. 33 1983年4月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 251-3971

編集責任者 川上皓市 (図書館庶務課長) 印刷 芳文堂印刷所